一　次の文章を読み、後の問いに答えよ。

京料理が現在のような名声と①繁栄を得たのには三つの要因があると考えられる。第一はいうまでもなく、観光客、特に相対的に裕福な旅行者の増加が、京都のレストラン需要を大きく引き上げたことにある。第二は上にも触れたように、高速道路の発達と冷蔵冷凍技術の進化により、京都市内でも十分に新鮮な魚介類が提供できる条件が整えられたこと。もう一つ、そしてこれがこの章の主題であるが、京都のレストランは［ａ］により大きな飛躍を②とげたと考えられる。

京都の都心は狭い。主要なレストランを考えるには、上・中・下京と祇園を含む東山区、それもかなり限定された一部の区域を考えれば十分である。［ア］上に挙げた一休[注1]の場合、京都市で３５０程度の店舗が掲載されているが、祇園・清水寺周辺で１１８、河原町・木屋町・先斗町周辺で81とこの２エリアで２００近く、市内全体の掲載店舗の実に６割近くが集中している。このエリアは、東西で５００m程度、南北でも1kmに満たない。この二つのエリアの両端となる、南東の清水五条坂から北西の河原町三条まで歩いても30分とかからない。［イ］徒歩で全域をカバーできる狭い範囲に、京都の名店と呼ばれるレストラン・料亭の６割程度が集中する。

飲食店というのは開業・③ハイ業率が極めて高く、常に競争の激しい業界であり、調理師の移動も激しい。徒歩圏内でこれだけ名店が集中していれば当然、料理人の出入りも大きく、技術の伝播速度も速い。この業界では事実上、特許制度が機能せず、他店の技術を④モホウすることは当然と考えられており、革新的な技術やメニューはあっというまに伝播する。

ここで見逃せないのは、このような技術伝播が、特定のジャンルに限定されないことで、京都の場合、特に80年代以降、中華、フレンチやイタリアンのメニューや製法技術を京料理のメニューに取り込むことが一般的になった点である。90年代以降は、中国以外のアジア系の料理法や素材も仲間入りした。例えば、和食のメニューに欠かせない先付では、液体の醤油の代わりにエスプーマ[注2]したものやポン酢のジュレを供するスタイルが、今世紀に入り急速に普及した。［ウ］、京料理では、アンコウの⑤肝のポン酢がしばしば先付で現れるが、自然とフォワグラを素材にしたものも広く供されるようになった。コースの最後には米食が供されるが、伝統的なご飯と御御付（おみお）けの組み合わせに替えて、リゾットやカレーが出てくることも珍しくなくなった。また、京都では合鴨を利用した料理が古くから盛んであるが、（合）鴨はフランス・イタリア料理でも重要な素材で、京料理に現れる合鴨も近年オレンジソースに似せて、和風の柑橘類を用いた料理が増えてきた。異業種交流や相互参入は和食とフレンチやイタリアン

に限定されるわけではない。留学生の多い京都では東南アジア系のレストランも多く、彼らの提供するタイやベトナムのメニューも、多くの異業種で取り入れられた。京のおばんざい[注3]を供する多くの小料理屋では、これらのアジア系のメニューが入るのは最早当たり前になった。

京都は江戸時代から観光都市であったが、それが料理店の繁栄にどの程度結びついていたか、実は疑問の余地がある。今世紀に入るまでの京都観光の主流は、関西の日帰り圏からの観光客と修学旅行客で、多くの料理店にとって収益の大半をもたらす夕食の⑥コ客に⑦占める観光客の比率は大きくなかったのではないか。日帰り客の大半は夕食前に京都を離れるし、宿泊客も旅館利用が大半であるため、修学旅行客はいうまでもなく、夕食を外食する比率は高くなかったであろう。京都生まれの作家、綿矢りさによる自伝的長編『手のひらの京（みやこ）』（2016）には、「京都の夜は祇園祭の日ですら早い。（中略）殆どの店が九時には閉まるので、四条でも九時過ぎにはもう人の姿がまばらになる。（中略）大体みんな（市）バスの時間を目安にして帰ってゆく」とある。観光客が夕食の主要⑥コ客になったのは意外と最近の現象であることをうかがわせる。東京や大阪のように繁華街でそぞろ歩きをする人波が深夜までみられるようになったのはごく最近のことである。

観光地での食の魅力を引き出すためには、三ツ星レストランや高級料亭だけでは十分ではない。手軽な予算の食べ歩きも重要な要素で、京都はこの面では大阪に比べて不利で、それが、京都の夜が早いことの一因でもあった。［エ］、今世紀に入り、町家を改造した多くのカフェや菓子店が急増し、その不利は⑧コクフクされつつある。多くの⑨老舗菓子店は、現代風にアレンジされたA和洋折衷の新しい商品やメニューを開発し、その全てが成功しているわけではないが、食べ歩きに似合った店舗が全体として急増したのは事実である。

また、戦後長期にわたり民営の職業紹介が禁止されていた時期でも、和食の調理師だけは例外とされ、京都と大阪には「口入れ」と呼ばれる民営の職業紹介所があり、これも都市経済学で集積の利益の要因の一つとされる分厚い労働市場の形成に⑩寄与した。技術の創造と伝播、人的交流、異業種間のメニューの［ｂ］、海外からの技術輸入、正しく、都市経済学の教科書にまとめられているような、集積の利益を実現するような実験場として京都の都心部は機能したといえよう。

（有賀健『京都　未完の産業都市のゆくえ』〈新潮社・二〇二三年〉に基づく）

注1　「一休」……宿泊施設やレストラン等のWEB予約サイト「一休.com」のこと。

注2　「エスプーマ」……スペインの料理人が開発した、亜酸化窒素を使って食材をムースのような泡状にする調理法。

注3　「おばんざい」……京都の一般的な家庭でつくられてきた惣菜のこと。

問一　傍線部①⑤⑦⑨⑩について、その読みを平仮名で書け。

問二　傍線部②③④⑥⑧について、片仮名を漢字にあらためよ。

問三　空欄 a に当てはまる最も適当な表現を次の選択肢①～⑤の中から一つ選び、番号で答えよ。

①急増　②競争　③伝播　④集積　⑤観光

問四　空欄 ア ～ エ に当てはまる最も適当な表現を次の選択肢①～⑤の中からそれぞれ一つ選び、番号で答えよ。なお、同じ表現を繰り返し使用することはない。

①しかし　②例えば　③また　④つまり　⑤ところで

問五　二重傍線部A「和洋折衷」に関連して、四字熟語に関する次の（一）と（二）の問いに答えよ。

（一）「和洋折衷」の読みを平仮名で書け。

（二）次の選択肢①～⑤は、それぞれ二つの四字熟語を組み合わせたものである。このうち、一つの組み合わせを除き、漢字の誤りがそれぞれの四字熟語に含まれている。正しい漢字を用いた組み合わせを①～⑤の中から一つ選び、番号で答えよ。

①厚顔無知　・　自我自賛
②不和雷同　・　百戦錬魔
③三身一体　・　興味深々
④以心伝心　・　五里霧中
⑤独断先行　・　温古知新

問六　空欄 b には「異なる要素が境界を越えて融合すること」を意味する外来語が入る。空欄 b に当てはまる最も適当な表現を次の選択肢①～⑤の中から一つ選び、番号で答えよ。

①クロスオーバー　②コラボレーション　③リメイク
④リバイバル　⑤ソフトランディング

問七　次の①～④の各文について、本文の内容と合致するものには○を、合致しないものには×を記せ。

①近世以来、京都は観光都市ではあったものの、そのことが現在のような京料理店の隆盛にすぐに結びついたわけではなかった。

②京都の飲食店においては、新たな技術が登場すると短期間でそれが他店に広まる傾向が強いが、背景には商業が可能なエリアの狭さと、飲食業界の苛烈な競争からくる料理人の勤務先移動のはなはだしさがある。

③京都の都心部における近年の飲食業界の発展は、高級店や三ツ星評価を受ける店などのいわゆる名店の力によるものではなく、食べ歩きに似合った大衆的な飲食店の増加に起因する。

④戦後において和食の調理師の職業紹介の仕組みが制限を受けなかったことが、京都の料理業界での雇いたい人と働きたい人の雇用の好循環を生んだ。

二　次の文章を読み、後の問いに答えよ。

「科学」への信頼の根拠

科学はなぜ信頼できるのでしょうか。信頼の根拠は、科学者たちが専門家集団として客観的な根拠をもとにしっかりとした議論を積み重ねているはずだと考えられるところに求められるように見えます。人文学も「人文科学」と呼ばれたりしますが、「科学」という言葉が「客観的な議論の積み重ね」を基礎とするものを意味すると、人文学は果たして「科学」なのか、という疑問がしばしば①テイされます。例えば哲学などは、少なくとも一般的なイメージでは、それぞれの哲学者が「自分の考え」を述べるだけで一向に話が積み上がらないものと考えられているように思います。そこには「進歩」という概念が欠けているというわけです。

「科学」はそうではなく、科学者たちが共同で客観的な知を積み重ねるものであって、そちらの方がよっぽど信頼できるといわれます。誰かが②恣意的に設定したルールの上に成立するものではなく、同じ知の基盤の上で客観的な議論を積み重ねているのだから、素人がその内容の一々について専門的な知識を持っていなくても、十分に信頼できると見なされるのです。

科学者たちの現場にもう少し近寄って見れば、その信頼の基盤は、より強固なものになるでしょう。科学者が「科学者」として認められるには、

専門研究でしっかりした業績を上げ、承認を受けなければなりません。論文を発表する専門誌は、ピア・レビュー形式[注1]を採るものがほとんどで、掲載の可否を決定するのはその道の専門家です。専門家が専門家としてきちんと評価できる論文以外は、科学者の「業績」としてカウントされません。この専門家によるチェック機能が、科学は信頼に足るという確信をより確かなものにしてくれます。論文の内容について素人には判断できなくても、専門家が競争原理に基づいて互いにチェックしている体制があるのだから、信頼に足ると考えることができる、というわけです。

科学者の現場

しかし本当にそうでしょうか。そうした「専門性」はなぜ無条件に信じられるのでしょう。トーマス・クーン（一九二二―九六年）という科学史研究者の議論を参③ショウしてみましょう。ここでも歴史を振り返ることが重要です。今日私たちがよく知っている高い専門性に依拠した研究体制は、クーンによれば、科学の［ア］なあり方ではありません。それは「通常科学」と名づけられる特殊な様態だといわれるのでした。

通常科学とは、クーンによれば、すでに出来上がった「パラダイム」を前提にした上で展開される「科学」だといわれます。パラダイムとは、科学研究において科学者に共有されている規則や基準のことです。通常科学は、パラダイムを前提にした上での「パズル解き」にすぎず、それによって新しい考え方をもたらすことはないとクーンは主張しました。こうしたクーンの議論は、一見すると「科学」に対する信頼を④ユるがす大胆な批判のようにも聞こえます。あるいは単に悪意をもって外野から投げられるナイフのようなものにすぎないと思えるかもしれません。

しかし、クーンの議論は、科学者たちから現場をよく分かっているとして支持されました。クーンがいうことの方が、科学者の実態に近いと見なされたのです。もしそうだとすれば、専門外の人間は実際には何を信頼しているのでしょうか。クーンのいう「通常科学」の内実をもう少し立ち入って見ていくことにしましょう。

今日の科学プロジェクトは、しばしば大きなお金と大掛かりな装置を必要とします。しかし、失敗する可能性のあるものに思い切って大きなリソースを⑤サくことには、ふつうリスクが伴います。しかし、通常科学には、広い意味ではそのリスクは存在しません。巨額の装置の導入は「それを使えば重要な事実を見つけられる、とパラダイムがA保証するから、研究者たちが取りかかるもの」（クーン　一九七一、二九頁）になっているからです。パラダイムを前提にする限り、こういう結果が出なければおかしいという「予測」があります。そのとき、Bパラダイム自体の正しさは前提になっていて、吟味の対象にはなりません。

そのようなかたちでパラダイムの「正しさ」が確信されている状態であれば、どれほど巨額の予算をかけた実験でも決して⑥無駄になることはありません。仮に実験結果がパラダイムの予測に⑦合致しなかったとしても、「なぜそうなったのか」という新たな課題が見出されたと考えられるからです。予測と結果の不一致は、パラダイムを疑うことに向けられるのではなく、パラダイム上の検討課題を増やすことになります。そこでは実験の失敗もまた広い意味で科学の「進歩」に⑧コウケンしたものと見なされるのです。

パズル解きの「進歩」

では、そのときの「進歩」とは、どういうものなのでしょうか。通常科学がパラダイムを前提にして浮かび上がる予測を実際に確かめるものだとすれば、「答え」はあらかじめ与えられているとも考えられます。「答え」が与えられている問題を解くことは「進歩」といえるのでしょうか。「通常科学」が、あらかじめ設定された「答え」に辿り着くための努力である限りにおいて、それは「パズル解き」と同じだとクーンがいうのも、そのためです。ルールが設定され、解答があることを保証された問題を解く科学者は、問題設定に悩む必要がありません。彼らはただ、パズル解きの速さを競うだけです。だとすれば科学の「進歩」と呼ばれるものは、パラダイムを下絵にしたジグソーパズルのピースを埋めていくようなものになるでしょう。そこでは、下絵自体を書き換えることは想定されていません。ゲームのルール自体を変えれば、個々の科学者の研究の「意味」は⑨チュウに浮いてしまいます。ジグソーパズルのピースは、それだけでは絵をなさないのです。

かといってパラダイムの下絵がない状態で与えられたピースを組み上げることで何らかの「絵」をつくることができるかといえば、それも困難といわざるをえません。「科学者」になるための訓練に、そうした能力を養うことは含まれていないからです。「通常科学」の問題がパズル解きだとすれば「科学者」になるために必要なのは、パズル解きの訓練になります。より早くパズルを解く能力を身につけるには、パラダイムの正しさを検証して知を積み上げる訓練より、パラダイムを前提にした上で効率よく学ぶことを優先されます。実際、科学者になるための教育には主に「教科書」が用いられ、その分野を基礎づけるような独創的な科学論文が使われることはありません。基盤となる知をそれぞれの科学者が自分で確かめながら進むより、その正しさを前提とした上で系統的に学ぶ方が、学習効率は高いと見なされるのです。

しかし、そうすることで科学者は「そのパラダイムへの信頼を教えこまれ、それを変えようと志す科学者はほとんどいない」（クーン　一九七一、

一八七頁）ことになります。こうした教育は、特定のパラダイムの枠組みを思考の型として嵌め込むものになるわけです。その教育は「しかし、通常科学的研究、教科書の定める伝統の中でのパズル解きのためには、これで科学者としての道具立てを十分与えた」（同頁）ことになります。科学の「専門家」とは、そうしてパラダイム自体を見直すことにかけては何の教育も受けていない人々を指すようになるのです。

「科学」への信頼の基盤は、専門家同士の相互チェックに見出されると先にいいました。しかし、そこでの「専門家」とは、特定のパラダイムを共有する科学者集団を意味しています。クーンがいうように、科学者たちは「個人の創造的仕事が、自分の同業者に対してのみ向けてなされ、仲間うちだけで評価されるというような職業集団」（同書、一八五頁）を形成します。その「仲間うちの評価」が、専門家同士の相互チェックと呼ばれるものの正体なのです。もちろん、科学者たちが馴れ合いで論文の審査をしているということではありません。科学者たちはむしろ、通常科学のパズル解きの中で互いに競争しながら、互いの成果を評価しているといえるでしょう。

しかし、その高い専門性は、見方を変えれば、分野外の批判から専門家を守る働きをしているようにも見えます。その分野で前提にされる知の枠組みは、内部で問われることがないだけでなく、外部からの批判も受け付けないものになっているのです。通常科学の営みは、専門の枠組みに閉じることで効率化するような体制の中で行われているのです。

C そうしたかたちでの知の蓄積は、パラダイム自体の変化に対する強い「保守性」を発揮することになるでしょう。パラダイムの上に積み重ねられた知は、パラダイムの枠の中で意味づけられるものですから、自分の研究の「意味」を失わせるような研究は⑩容易に受け入れることができなくなります。専門家間のピア・レビューのシステムは、この点に関しては、大きなマイナスとして作用するほかありません。自分たちの拠って立つ知の基盤を吹き飛ばすような革新的な論文は、「専門家」にとっては「とんでもないもの」としか評価できないのです。「科学者」としての業績が専門家間のチェックにのみ依存する体制を採る限り、そのような革新的な論文を書く人は最初から「科学者」として認められないことになるでしょう。

パラダイムを前提にした科学の「進歩」は、その意味で、パラダイム自体を変化させていく知の更新をもたらすものへの本質的な反発をもつものになっているのです。

（荒谷大輔『使える哲学』〈講談社・二〇二一年〉に基づく）

注1　「ピア・レビュー形式」……同じ立場や職種の人々が業務や業績等を評価・審査すること。

問一　傍線部①③④⑧⑨について、片仮名を漢字にあらためよ。

問二　傍線部②⑤⑥⑦⑩について、その読みを平仮名で書け。

問三　次に示す〔脱文〕は本文から抜き取ったものである。この〔脱文〕を挿入するのに最も適当な場所を本文中から探し出し、挿入部分の直前の十文字（句読点も一字として数える）を抜き出せ。

〔脱文〕無駄になるかもしれないのに、そんなお金と労力が費やせるかというわけです。

問四　空欄［　ア　］に当てはまる表現として最も適切なものを次の選択肢①～⑤の中から一つ選び、番号で答えよ。

①普遍的　②大衆的　③合理的　④慣習的　⑤持続的

問五　二重傍線部A「保証」について、「保証」という語の使い方として適切なものを次の例文①～⑤の中から二つ選び、その番号を書け。なお、回答の順序は問わない。

①従業員の生活を保証する。
②損害を保証する。
③奨学金の返済を保証する。
④国家の安全を保証する。
⑤製品の品質を保証する。

問六　二重傍線部B「パラダイム自体の正しさは前提になっていて、吟味の対象にはなりません」とは、つまりどういうことか。次に示す〔文〕は、この問いに答えたものである。〔文〕の空欄部分に当てはまる最も適当な十三字の表現を本文より抜き出せ。

〔文〕［　　］は行われない、ということ。

問七　二重傍線部C「そうしたかたちでの知の蓄積は、パラダイム自体の変化に対する強い「保守性」を発揮することになる」について、なぜ「強い「保守性」が発揮」されるのか。その理由を五十字以上、六十字以内（句読点も一字として数える）で説明せよ。その際、「知の更新」という表現を必ず用いること。

問八　次の①～④の各文について、本文の内容と合致するものには○を、合致しないものには×を記せ。

①筆者は、「科学」とは「進歩」という概念を持ち、客観性のある議論を経た知の積み重ねを指すものであるとする。その点からすると、「人文科学」には不足が目立つとみなされがちだが、それは「科学」というものの捉え方の誤りによるものである。

②クーンは、通常科学の在り方について、「パズル解き」に過ぎず、新しい考え方をもたらさないものであると述べたが、その主張は科学が直面している現状の課題を端的に言い当てているとして科学者たちから支持された。

③科学者の養成においては、これまで積み上げられてきたパラダイムを前提にした内容の学習が行われる。

④科学者たちは共通の専門的基盤の上に立ち、競い合いながら相互の研究成果を評価し合っているが、そのことは専門家ではない人間からの批判を封じてしまうことにもなっている。

三　次に示す〔例〕のように、意味が対になる字を組み合わせた二字熟語（傍線を引いた箇所）をつくるとき、①～④の文中の空欄に当てはまる漢字をそれぞれ書け。

〔例〕彼は終□冷静な態度を取り続けた　【答え】始

①動きに□急をつける

②清□併せ呑む

③知識の深□を判断する

④金銭を□借する

〈以下余白〉